

生育衰退期に入って、なお 2 ton 以上の生産をあげていることは注目できる。

このような収量性と、高温時期に多発する冠さび病に強いことから、「ヤマアオバ」は長期間の栽培に好適した品種であるといえる。

栽培・利用の要点

「ヤマアオバ」は図 2 にみられるように、各地域とも好成績を示しており適応性はかなり広いが、この品種の特性を十分發揮させるためには、

栽培期間に比較的

余裕のある転換田や飼料専用畑を選ぶことが大切である。栽培に当って特に留意する点はないが、播種期は出来るだけ早くし、生育期間が長いので途中で肥切れさせないこと。ただし、生育後半での多量の追肥は、再生障害を起すから、若干控え目にしたい。また、草丈が 50~60 cm になれば刈取り、過繁茂をさけることなどが多収の要因となる。利用面では、生草はもちろん貯蔵用にも向いている。それは、この品種が他の 4 倍体品種より乾物率が 3~5 % 高く、乾燥速度も早いのでサイレージや乾草にしやすいからである。貯蔵利用す

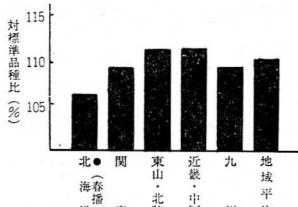


図 2 ヤマアオバの対標準品種収量比

(16 場所 2 カ年平均)

る場合には出穂期頃に高い草生産をあげるよう、春先の刈取時期や施肥法などを考えて管理する必要がある。

おわりに

山口県農業試験場においては、昭和 39 年より主として西日本を対象にイタリアンライグラスの品種改良に取組んでいる。その成果として、前述した「ヤマアオバ」の他に 2 つの品種を作り出している。その一つは「ワセニタカ」(農林合 5 号)で、この品種は早生種に属し、水田裏作など短期利用に向くものである。もう一つは「ミナミワセ」(農林 8 号)で、これは極早生種で、西南暖地の平坦部において、早期水稻や夏作飼料作物との組合せ栽培や暖地型牧草地への追播用など極短期利用に好適するものであるが、これらの品種についても、近い機会に詳しく紹介したいと思っている。

いずれにしても、イタリアンライグラスはわが国で栽培されている牧草の中では重要なものの一つであり、最近公共の機関や民間から新しい優秀な品種がかなり出回っている。そこで、畜産農家においても、品種に対する認識を深められ、その特徴を十分把握して、各自の立地条件や経営形態によく適応した品種を選び、合理的な栽培・利用が行われることを切に望みたい。

代るイタリアンライグラスが裏作として注目され、とくに早生のもので年内 1~2 回刈取りが出来、春先に 1 回収穫が出来て、その後に水稻作が出来ればよい。一方当地域は豪雪地域であり、耐雪性も相当強いことが望まれ、結局早生多収耐雪の 3 点が育成目的とされた。

当北陸農試で、鳥取在来（鳥取種畜牧場）を育種母材にして、昭和 37 年から耐雪性、多収性と早生を主な育種目標として、4 世代にわたる母系選抜の結果、育成されたものである。昭和 39 年から「高系 1 号」の系統名で系統適応性検定試験を全国各地で実施して戴き、昭和 45 年に農林省登録品種となり、昭和 47 年には OECD に登録された。

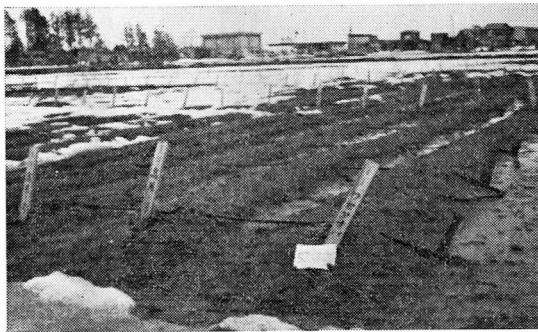
イタリアンライグラスの 新品種「ワセアオバ」育成 目的と栽培利用について

北陸農試作物第 4 研究室長

吉岡 昌二郎

育成目的と来歴

昭和 36 年当時飼料作物育成の機運が次第に高まって来た。飼料カブの育成に重点があったが、多労のため栽培面積が減少して來たので、これに



融雪直後の状態 52.3.28

特 性

ワセアオバは2倍体の早生品種で越冬前の生育が旺盛である。また比較的耐雪性も強い方である。このことは表1の融雪後の春1番刈の収量が高いことで明らかである。

なお特性を表2に一部示した。出穂期の草丈はやや高い方であり、葉幅もやや広く、一茎当り葉重は少ない方であり、一枚当り葉面積、一茎当り葉数、葉の乾物率は中位である。再生力は弱い。雪腐れ抵抗性は新潟系、マンモスAには劣るがワセヒカリ、オオバヒカリ、ナスヒカリより強く、ヒタチアオバと同程度である。このため畑地より比較的雪腐病の発生の少ない水田裏作の場合、根雪日数100日以内ならばワセアオバの耐雪性で十分である。

冠さび病およびかさ枯病に対する抵抗性は、必ずしも強いとは言えない。粗蛋白含量、有効態炭水化物含量(TAC)は他の品種と同程度であるが、出穂期の乾物率はやや高い。

栽培上の注意

新潟、関東以南の水田裏作に適する早生品種であって早期利用の青刈用としてよく適している。なお早生であり、水田裏作を考慮に入れた場合、5月15日刈取を田植のための限界と見て、表1に全国各地におけるワセアオバと他の代表品種の乾物収量を示した。こ

れから見て全国共通に早生品種として利用出来る。

実際栽培にあたっては、施肥量はやや多くしないと草立密度が低く、多収とならない。また播種量もやや多目にする必要がある。なお暖地では、先に述べたように冠さび病には強くないので、早期になるべく刈取り利用を考えた方が有利と思われる。雪積地においては2倍体品種では強い方なので、水田裏作に畜産農家は利用することが有利であろう。

育成地および各地における試験成績

ワセアオバは越冬前および春の生育は良好で、表1の育成地の成績より寒冷地では他の品種より多収であり、全国的にみると、寒冷地においては、オオバヒカリより高収、中間地帯では播種期がおくれるとオオバヒカリより収量がやや低くなり、暖地では春の刈取りが早いときはオオバヒカリより多収が得られる。しかしこの場合サビ病に注意しやや早めに刈る必要があろう。

表1 「ワセアオバ」および他品種の全国各地における乾物収量 (kg/10a)

地 域	試験場所	播 種 月 日 (昭和年,月,日)	刈 取 時 期 (月/日)	刈取 回数	乾 物 収 量				
					ワ セ ア オ バ	オ ヒ カ リ	市 販 種	鳥 取 系	
寒 冷 地	青森農試	40.8.26	年内1回, 5/25	2	510	500	—	—	
	山形農試	40.8.31	越冬前のみ	1	204	127	145	—	
	北陸農試	49.9.12	5/13	1	617	419	405	489	
	石川農試	40.9.8	11/18, 4/11	2	511	501	442	—	
	石川農試	41.9.12	11/24, 4/11, 5/12	3	550	—	460	—	
	長野農試	42.9.16	5/10	1	451	412	—	—	
中 間 地	滋賀種畜	41.10.6	4/26	1	615	471	570	—	
	茨城畜試	39.9.7	秋2回, 春2回	4	898	946	786	828	
	茨城畜試	39.9.22	秋1回, 春2回	3	928	1,030	917	807	
	茨城畜試	39.10.7	春3回	3	968	958	860	821	
	茨城畜試	39.10.22	春3回	3	631	807	706	693	
	群馬農試	40.9.18	11/5, 4/28	2	524	437	—	—	
	群馬農試	41.9.12	4/18, 5/16	2	533	554	571	—	
	神奈川畜試	40.9.8	11/29, 3/31, 4/26	3	1,130	1,026	—	—	
	神奈川畜試	41.9.20	11/14, 4/5, 5/8	3	1,197	1,118	1,126	—	
暖 地	香川農試	40.9.25	12/21, 3/18, 4/27	3	673	649	—	—	
	香川農試	41.10.1	12/14, 3/24, 4/24	3	780	769	774	—	
	宮崎総農試	40.9.21	12/5, 2/10, 3/25, 5/4	4	1,181	962	—	—	
	宮崎総農試	41.9.20	2/20, 4/20, 5/15	3	884	719	907	—	

表2 個体植による「ワセアオバ」および「ナスヒカリ」の特性表

特 性 項 目 品 目	春 1 回 目 の 草 丈	春 2 回 目 の 草 丈	出 穂 月 日	出 穂 時 期 (生 長 角 度)	出 穂 時 期 に お け る 止 葉 の 葉 身 長	出 穗 時 期 に お け る 止 葉 の 葉 身 幅	出 穗 時 期 に お け る 止 葉 の 葉 身 幅	植物 体 の 基 部 高 さ	出 穗 時 期 に お け る 草 高 さ	出 穗 個 体 率	出 穗 程 度	穗 長
单 位	cm	cm	月日	cm	mm	cm	cm	cm	cm	%	段階	cm
調査月、日、年	4/24	5/24	—	5/25	5/24	5/24	5/24	5/26	5/28	5/30	5/27	6/6
ワセアオバ	41.1	71.9	5.13	64.1	18.8	8.9	53.3	60.8	62.0	94.4	5.0	24.5
ナスヒカリ	35.4	60.0	5.22	38.3	18.5	8.4	40.0	68.9	47.6	31.0	3.3	25.8

注1: 調査場所: 北陸農試、水田転換3年目畑(重粘土)

播種月日: 昭和51年9月24日

耕種法: 54cm×67cmの1本立(点播)、乱塊法1区あたり20個体、6反復、施肥、成分N:P:K=各0.45kg/a。